



向陵広場

発行号 第29号
 発行日 平成30年5月1日(火)
 発行元 向陵編集校友会
 責任者 伊藤有司 (県10回卒)

豊橋筆の発展に貢献されている 杉浦良雄氏 県商2回卒(昭和28年3月卒)

経済産業大臣指定、
 伝統的工芸品 豊橋筆
 豊橋筆振興協同組合理事長
 株式会社 杉浦製筆所代表者



工作中的杉浦良雄氏

杉浦良雄氏は、豊商卒業後、伝統技術を継承する「豊橋筆」の杉浦製筆所に入社し、父の下で技術を身につけ、三代目を受け継ぎ現在に至っている。

製筆所の創業は大正11年であり、昭和51年に国の伝統的工芸品に指定されている。

筆の製造工程は、選別→毛もみ→寸切り→練りませ→上毛かけ→仕上げ→刻銘の工程により1本1本手作業で生産している。「豊橋筆」は墨含みが良く、墨はけが遅い特徴があり、使いやすく書道・絵画用として適している。原材料の混毛に、水を用いて交ぜあわせる



「練りませ」の工程を用いることに、豊橋筆の最大の特徴がある。約36の筆作りの工程は、全部手作業で行われるため、一人の職人が一日に作る筆の数は細筆で50本、太筆で30本と言われる。

現在は息子の美充(よしみつ)さんが伝統工芸士となり四代目を引き継ぎ日々筆作りをするかたわら、後進の指導にも力を注いでいる。ただ筆を作るだけでなく、書き手がどんな「書」を書きたいのか？どんな目的・どんな想いで書くのか？を頭の中でイメージしながら、筆作りと真摯に向き合うことが重要だと言っている。現在杉浦製筆所には、年齢層もさまざまな7人の職人がいます。一番若い職人は25歳。中学生の時に職場体験で筆作りに魅せられて、この道に入ることを決意したそうです。こうした若い世代の人が伝統工芸に興味を持ち、伝統工芸士を目指すことは、何より業界の発展つながるため、製筆所内での指導だけでなく学校などに出向いて実演や指導をしている。子供たちに製造工程を体験してもらったり、自分の筆として接着・仕上げをして1本の筆を完成させた時の笑顔を見るととても嬉しい気持ちになります。

書道ブームで、書道を学ばれる方も増えている。催事会場などで筆を見に来られる方の多くは40代～70代の女性ですが、若い世代の方も増えてきている印象です。女性の書道家や毛筆を使ったデザイン書・お酒の銘柄の字・企業のロゴなどを作る「デザイン書道家」として、若い女性が活躍していることも面白い風になっていると思います。

「Japan Vision Vol.53 地域の未来を支える人」より抜粋